

植村正久の文学論（植村正久記念講座、第三回）

日時・2024年6月30日（日）15:00-17:00

会場・日本キリスト教会札幌北一条教会

はじめに

1) 札幌北一条教会と植村正久

- ・武田清子『植村正久』（2001）→「弟子を送りつづけて地方教会を育てる」。教会建設100周年記念集会。無牧の時代の背後には植村がいた。高橋久野→「君も勉強して牧師になりなさい」。高倉徳太郎、小野村林蔵など、植村の人選によって北辰教会は支えられた。
- ・高倉徳太郎の教会理解についての講演。

2) 文学への植村の関心

- ・高倉徳太郎→「先生（植村正久）は実に多方面な方でほとんどたんげいすべからず。預言者、伝道者、牧師、説教者、学者、文学者、詩人、教会政治、経世家、日く何」。
- ・久山 康→「植村正久は当時第一流の西洋文学の理解者であり、紹介者であった。彼が（明治）二十三年に創刊した『日本評論』には、ユーゴー、トルストイ、カーライル、ゲーテ、ワーズワース、ブラウニング等を紹介されている」。

3) どうして植村の文学論なのか？

- ・植村が文学的記述の仕方を通して世界を理解したことを探る。植村の文化の神学を探る。
- ・文学が植村の信仰と伝道においてもつ意味と神学思想における文学の位置づけと意義を探ること。

1. 植村正久の啓蒙的文学理解

1) 植村正久の文学的著作

- ・『真理一斑』（1884）→無神論、不可知論的風潮に対して、有神論の真理性を弁証する目的
- ・『福音道志流部』（1885）→西洋の近代キリスト教思想の紹介とキリスト教信仰の移植を目指す。
- ・1897年代以後から植村は主に説教集を出版。「靈性の危機」（1891）、「信仰の友」（1898）、「祈りの生活」（1910年）、そして大正期に入ると「信仰の生活」（1923）などが代表的な説教集。

2) 植村の文学的評論

- ・『日本評論』（1891）→日本社会を相手にキリスト教的な観点から社会の啓蒙と文化・芸術の質的向上を狙う。宗教はもちろん、政治、社会、文芸、言語、そしてジャーナリズムまで及ぶ。キリスト教主義に立脚して、日本の社会が西洋の文明的な思潮に出会うことによって社会が進歩し、日本人が啓蒙されることを「天職」と理解。
- ・『福音週報』（1891）→福音伝道を中心に読者層を教会内外に求めていたもの。「わが福音週報は、

日本のキリスト教徒に、その意志所見を開陣交換するに機関を共し、内外諸名士の卓説を掲げ、福音進歩の形勢を報じ、疑義を啓き、或いを弁じて、未信の人を導き、およそキリスト教徒の徳を建て、知識を進むるに有益なることを努めて怠らざるを期す」。

3) 植村の高尚なる文学

- ・「余輩は厳正、潔白なる文学の隆興を謀るものなり。……日本評論は、健全なる文学を進むるの小機関を以て自ら任じ、国文の粹を保ち、欧文の美を導き、もって正大、純潔、雄衛、高尚ある文学の築造に従事せんと欲するものなり」。
- ・「高尚なる文学」→特定の宗教の教え、あるいは信仰に基づいてなされる宗教文学を指すのではなく、人間の情緒・思想に基づいた創造の力を借りて、言語または文字によって表現した文学作品。
- ・文学とは、信仰の領域を含めた自然の次元にある人間の経験に基づいて行われた人間の精神的な活動による創造物。
- ・「詩人論」(1890) →「詩は生命の批評なり。その目的は高尚なる思想を人生に適用せしむるに在りと。今の詩に高尚なる思想ありや。その生命の批評たるものいづくに在りや。新体詩とか称するものの未熟なる、あえて論弁するを須いず。従来詩には小坂抜く子の日はあれど、現今の社会無し」。
- 優れた文学は志などがたかく、衆にぬきんでている「高邁な思想」に裏付けなければならない。

2. 文学と文学者

1) 文学者—高潔な世界へと導く先導者

- ・「高邁な思想」は、文学者の「徳義」によって生み出されるもの。植村は「真正の文学者には真正の徳義を要す」と言い、芸術家の条件については「第一、芸術家は善人たるを要す。第二、美術家は其の作をなすにおいて、善正なる目的あるを要す」と言う。
- ・文学者は「人生の秘義を解説」することによって「真理」を語る存在。その「真理」とは、人間の心を豊かにさせ、生き甲斐を感じさせる意味での啓蒙的な「真理」。そのような意味で文学者は、純潔な精神をもつ「人生の改革者」である。
- ・「文学者の徳義」(1890) →「常に汝の胸をして自由の念を熾んにし、毫厘だも賤しき利欲に心を傾くるなかれ。そは自由と利欲とは両立せざるものなればなり。富は自由なる人を尋ねず、静かなところに入らず、徳義の後を奔らず、正しき人の前にかくる。もし汝富を思わばこれすでに汝の思想は奴隸となり、汝の心はすでに、汝のものにあらざるなり」。

2) ヴィクトル・ユーゴーとトルストイについての植村の見解

- ・「ヴィクトル・ユーゴー」(1890) →「世には写実文学なる者あり。之を唱ふる者は単に社会人物の

實際を画き出すを主として、其尚ふる所、理想の境に在らず。此の輩をしてユーゴの小説を読ましめば是れ異常の一ローマンチックーなり、理想に傾ける者なり仏蘭西の文学に起これる近來の変遷を見れば、ユーゴ一流の小説廢れて、極端に走れる写実派の小説家ゾラの徒、勢力を專にしたるが如き有様なきにあらねど、是れ反動に過ぎず理想派の勢力を得るに至らんこと期して俟つべし。

- ・単に人生の醜悪さを暴露するだけの「写実主義文学」は、世のあらゆる「不潔汚穢なる事物」をあるがままに描くことを目的。

- ・「トルストイ伯」(1890) → 「ロシアに絶論の名士あり、トルストイ伯と言う。その名声雷のごとく、文学の世界に轟きわたれり。伯は文章の大家なり。経世の志厚き有為の士なり。敬虔の念に富める宗教家なり」。「社会の預言者」。「救世の福音」。

- ・「トルストイ伯」(1890) → 「小説はその預言を四方に伝え、万民を教えんと欲する手段に過ぎざるなり。伯は真実無妄、熱心燃ゆるがごとく、その口に説き、筆に唱うところは、忌み憚るところなく、至るところにこれを実行せんことを試みるの人なり。(中略)トルストイ伯は写実小説の巨擘なり。その社会の實際を写すや、理想の熱情内に溢るるの心をもってせり。ゆえにその小説は時として伝奇異常の熊を帯ぶることあり。日本のトルストイいづくにかある」。

- ・プロテスタントとしての理想主義の宣伝とその反面としての写実主義を批判。植村の文学理解の広さ、その寛容さの根底は「小説は最も多数の聴衆を所有せる説教者のごと」という考えが働いている。

→文学は、万有に内在している「美」に対して人の目を開かせる力をもつもの。そしてそれに反する悪影響がある場合は沈黙の義務を守るべき。

3. 文学と宗教の心としての「天性」—文学から宗教へ

1) 『日本評論』とキリスト教弁証

- ・日本評論のもう一つの目的→「わが日本評論は、力を極めて、キリスト教の真理たるを弁明し、その拡張に従事せんと欲するものなり」。植村が思想的営みにおいて、文学を重んじたもう一つの理由は「宗教的な存在」である人間を「真正なる宗教」に導くため。

- ・「詩人論」(1890) → 「詩とは何の謂ぞ。物に触れ、事に当たり、情熱し、感極まるときは、通常の言語をもって、直接にこれを述べ尽くすこと能わず、ここにおいて止むを得ず、此を借り、興に訴えて、間接にこれを言い出でんと欲す、これ実に天性に発するものなり」。

- ・文学は、「天性」、すなわち人間の心の動き、すなわち人間の心の奥にある感動や思想などを言語化したもの。詩の心は、実に「天性に発するもの」になりうると言わざるをえない。植村の言う文学の心である「天性」は、人間をして真の宗教へと導く接点。

2) 植村における宗教と文学

- ・『真理一斑』(1884)における「宗教と人間」→「社会は単純なる観念に支配せらるべからず、すなわち高大なる敬崇、服事の目的を要するものなり。人生の更新は天然の敬崇心に依らざるを得ず、この更新の本原に基づかずして世の改良、更新を企図するは甚だ録由なき事とす」。
- ・人間の「本原」に内在する「天然の宗教心」。観念を超えた体験的「敬崇心」。人間は「神」という絶対者を求める「奉教心」を持っており、その宗教性を発揚することによって「無限なる対偶」すなわち神認識に至る。
- ・「宗教心」というのは、啓蒙知識人のいう単なる「知力」ではなく、「人間の心理に勢力を占むべき生命なる」もの。植村からみれば、人間の宗教心というものは単なる感情ではなく、人間の人格の基となる「知・情・意」である。
- ・植村のいう「天性」とは、神性と人生の「接点」であった。文学の世界の根底には形而上の世界が予想され、この世界への課程としてのみ文学の存在理由が認められるのです。だから、文学の独自の領域も中間的な存在に過ぎないこととなる。
- 植村の文学理解が、宗教家の文学観という枠内に止まるものであった所以であろう。こうして文学の本質は植村の信仰的世界全体の一契機と考えてこそ意味をもつ。伝道を自らの「天職」とした植村にとって、文学は広い意味でキリスト教信仰の伝播、また神学の営みの一翼を担うものでなければならなかった。植村の「天性に発するもの」としての文学理解は、キリスト教信仰の擁護、確立、その受容への準備をなす概念であったと言っても過言ではない。

4. 植村の文学理解における人間像

1) 植村の「高尚なる人間」

- ・植村にとって文学は高尚なる人間を形成し、真正なる宗教へと導くもの。「高尚なる人間」とは、道徳一色で塗りつぶされた人間像ではなく、「知・情・意」の三つの働きの総合体としての人間像。
- ・この三者を人間の意識の働きとすれば、それぞれが向かう対象は「真・善・美」という三つの価値領域。植村にとって信仰とは、人格が働くところに成り立つものであり、全人格的な営みである。
- ・「信仰にも倫理あり」(1899) →「智力信仰の一要素たらば、信仰はまた論理に合わざるべからず。かくありてこそこれを己れ以外の公衆に訴えてその首旨を得べきなれ。宗教は決して没論理のものにあらず」。信仰は知的論理性と両立すべきもの。学問—神学—は教会形成にとって欠くべからずもの。東京神学社の設立のもう一つの目的。

2) 文学における「情」の問題

- ・植村は文学思想においては「情」の働きの重要性を強調する。しかし、それは理性を欠いた単なる無分別な情動のようなものでもなければ、一時的な高揚、感情の衝動的な高まりでもない。「真正

なる文学」を創造する力であり、ついには人間を「真正な宗教」へと導く「天性」、すなわち「宗教心」と通じるものである。

- ・「宗教は果たして迷信なるか」(1903) → 「善を欲し、美を好み、完全を慕う、これ人情の自然なり。芸術の美妙、学術の真理、道德の精華を歎美するは、宗教に入る門なり。人の理性、美的趣味、道德心は神に達する途なり」。植村の思想における人間像には宗教的人間像があつて、また文学的人間像が区別されているのではない。
 - ・植村にとって「情」は人格構成の一機能として人間性の奥に根ざし、人格において中枢的な場を占めるもの。ここから生じる想像力の成果は「美」の領域において働く。それが植村の言う文学である。この「情」は知的活動や意志の力と相俟って「真正の宗教」へと導く「宗教心」として働く。これが人間の内部の「真・善・美」といった各領域で絶対的なものを追求する霊性である。
- 植村が文学に求めていた「高尚なる真理」とは、神の恩寵によって完成されていく。人間の霊性が神の愛によってはじめて開花され、社会の実現のなかで人間の愛に目醒める。植村にとって美というのは、キリストの永遠の愛によってはじめて真実の輝きを發揮する。

5. 植村正久と讃美歌

1) 日本の最初の讃美歌

- ・日本語による最初の讃美歌は、「主われを愛す」という讃美歌であつた（讃美歌 21、484 番）。
「エスワレヲ愛シマス、サワ聖書申シマス。彼レニ子供中、信スレハ属ス。ハイエス愛ス、ハイエス愛ス、サワ聖書申ス」。
- ・1872 年第一回宣教師会議にて発表されたもの。横浜公会に潜入したスパイ正木讓の報告。
- ・1874 年に 7 種類の讃美歌、それは小冊の讃美歌集を刊行。日本基督公会の讃美歌の中には「ちとせのいわよ」が収録されている。
①われらのいわや、われをかこめな。さきたるわきの、みづまたちしほ。つみなやみも、きよくあらへよ。
②かいなわよわく、おきてにたえず。こころはげめと、なみだたえずも。わがきみのみぞ、つみよくあがなよ」。
- ・『新選讃美歌』から。1954 年版の讃美歌 319 番、「わずらわしきよを」。歌詞は 1818 年にブラウン宣教師の母であるフィベさんの作だと知られている。
①ゆふぐれしづかに、いのりせんとして。よのわづらひより、しばしのがる。
②かみよりほかには、きくものなき。木がげにひれふし、つみをくいぬ。
③すぎこしめぐみを、おもひつづけ。いよよゆくすえの、さちをもねがふ」。

2) 植村正久と讃美歌

- ・阿部義宗（1886－1980）の植村についての評価→「植村正久先生は決して偉大な雄弁家ではなかった。むしろ、吃りがちな宗教家であった。しかも、富士見町教会に、常に数百の会衆をひきつけた原因の一つは、先生が常に讃美歌に細心の注意を払われた点にあったと思う。もちろん先生が、文学に関する秀た教養をもっておられたためであるけれども、先生の説教と讃美歌とが完全に一致して礼拝の精神を高めたことを私たちは学びたい」。
- ・韓国における最初の讃美歌→韓国でいわゆる讃美歌らしいものは1894年アンダーウッドが117曲を収録し刊行した『讃美歌』。この『讃美歌』には、イギリスの讃美歌から79曲、アメリカの讃美からは23曲が、韓国人が作曲した7曲の讃美歌、詩編から1曲、作者不明の讃美歌6曲、主の祈りなど、構成をも多様多彩な讃美歌であった。歌詞のほとんどが英米の文学作品、とくに浪漫主義や古典主義などの作品に旋律をつけたものが多い。そういった意味で『讃美歌』は、西洋の文学作品を韓国に紹介する媒介。
- ・讃美歌編集に当たって、外国人宣教師の前に立ち塞がっていた問題は「God」の解釈であった。中国語聖書が普及されていた時代に、韓国人は聖書の神を「上帝」と呼んでいた。植村も『真理一般』において「上帝」と呼んだ。植村が儒教的影響を受けていたことの証。韓国に赴いた宣教師たちは、儒教的概念を捨て、これに対して多くの来韓宣教師は「ヤーウェ」の概念を採択する。しかし、アンダーウッドは韓国人のなじみの表現である「ハナム」を採択する。韓国人の心性に訴えようと土着的考えがみられる。
- ・韓国の「Patriotic Hymn」というタイトル讃美歌。韓国の国歌がスコットランドの民謡の「Auld Lang Syne」（蛍の光）の旋律で収録される。「東海の海水が乾き果て、白頭山が磨り減る時まで。神のお護りくださる我が国、万歳。むくげの花、三千里、華麗な山河。大韓の人よ、大韓を永久に保全せよ」。これを編集したのは尹致昊（ユン・チホ）。朝鮮という国を神にゆだねることを訴えており、そこに将来の希望を持たせるという終末論的信仰を語る。朝鮮と日本の歴史の終末は、神の御手の中にあること、神のみが歴史の主宰者であるという絶対依存の信仰であろう。
- ・植村の讃美歌についての業績。第一は、『東京毎週新報』に1883年に「讃美歌編輯の事を記す」という一文を投稿する。これは日本人最初の讃美歌論だと言われている。第二は、1888年に刊行された『新撰讃美歌』の編集の中心的な役割を担ったこと。『新撰讃美歌』の楽譜付きは、1890年に刊行される。日本基督教会と組合教会が共同の作業。組合教会からの委員は、松山高吉、宮川経輝、宣教師のジョルヂ・オルチン。日本基督教会からの委員は、奥野昌綱、瀬川浅、フルベッキ、そして植村正久。第三は、讃美歌についてのエッセーなどを雑誌や新聞等に多数執筆したこと。これらの文章は、明治、大正時代の讃美歌についての貴重な情報源。
- ・「キリスト教の音楽」（1896）→「府下の牧師伝道者を首め教会の有志団結して、此の幣を救い、音楽を発達せしむるの道を講じ、讃美歌をして礼拝の活ける一要素たらしむるは、今日の急務なり。

府下の教会において音楽の進歩著しきを見ば、其の利益全国に普及せんこと期して待つべきのみ」。植村のキリスト教音楽についての理解。

- ・「讚美歌編輯の事を記す」(1883) → 「吾邦の言語発音の風は極めて平滑にして抑揚に乏しい。故に一句を五文字若しくは七文字より多くなすときは、句調甚だ悪し。是れ五文字七文字の慣例を起せる一原因ならんか。然し何づれの場合にても必ず此の制んび従はざるべからずとするは膠柱の論なるべし、時によりては他の方法を用うるも苦しからずとす」。
 - ・「讚美歌編輯の事を記す」(1883) → 「七五とは文字の七五と心得べからず即ち音の五七をいへるなり、八八其他の体製亦同じ。ヨルダンは三音よりなれるものなるを文字の数に泥みて四つと做し之を歌うときに至りてヨルダーンなどといふは最も聞苦し。およそ今日の詠歌には此の誤謬最も多く見えたり」。
 - ・植村の発言の中にある「ことば」というものをどのようにとらえるべきか。いわば現代にも通じる問題も含ませていると言えよう。「ことば」の選択という問題は、「ことば」を文化の中にどのように位置づけていくのかを強調している。ことばを選択するかどうかはまさにその時代の人間が決めること。植村が投げかけた問題は、時代を経て現代に生きる私たちにも課せられている課題だと言っても過言ではないだろう。
- 「キリスト教と詩歌」(1903)。→ キリスト教は古来から詩歌と芸術を通して崇高な思想を鼓吹してきた。その詩歌が讚美歌。讚美歌は、第一は「希望を与える歌」、第二は「神の愛を広める歌」、第三は「戦場ともいえる人生において勝利を与える歌」。讚美歌の編集によるキリスト教の土着化。

結びに代えて

- 1) 文学というのは、それがいかに優れた価値を生み出すものであっても、その自己中心主義という本質のゆえに、墮落への誘惑に対して歯止めとなる力を持たないと思う。これに対して宗教—キリスト教—は、自己を中心せず神を中心とし、自己を忘れて神に同化することを目指す。同化とは自己を消滅させることではなく、高尚なるかつ真正なる自己を完成させること。
- 2) 植村正久の文学的営みにおいて「讚美歌編輯」は重要な位置を占めている。讚美歌は日本の民衆にキリスト教信仰の体験的に伝える媒介。それと同時に民衆を信仰的に開化する役割を果たすもの。讚美歌の翻訳と旋律を伝えることは、外国のキリスト教の移植より、キリスト教信仰の深化のため。自国語で讚美歌を歌えるため外国語の讚美歌を翻訳して讚美歌集を編輯することが、植村が目指していた「独立した自由教会」形成ではなかったのだろうか。(例：韓国の教会の場合)。
- 3) 文芸と宗教—キリスト教—をこよなく愛していた植村のことば。「宗教と文学」(1893)の一文。「牧師恥なくして、講壇の上より詩歌小説の句を誦し、文学者好んで宗教的理想に、その趣向を仮るに至りたらんには、これあに文学の黄金時代にあらずや」。植村は「キリスト教と文学の事情を尽くせる好媒介者」の出現を期待している。これは植村正久が残した課題。